明日への道標

生死を度外視する決心
―勝海舟 江戸城無血開城―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

江戸城への総攻撃は２日後に迫っていた。薩摩と長州を中心とする東征軍はすでに江戸城を完全包囲する陣形を固めていた。しかし東征大総督府参謀の西郷隆盛は血気にはやる部下たちを抑え、幕府陸軍総裁の勝海舟（1823－1899）との会談が終了するまで待機せよときびしく戒めた。

将軍・徳川慶喜から全権を委任された勝は江戸を守るために開戦回避を願っていた。だが交渉が決裂した場合、江戸を焦土と化すことも辞さない覚悟でいた。総攻撃の前夜に江戸城と町々に火を放ち、あらかじめ江戸湾に集めておいた雇い船で避難民を救出するという捨て身の作戦を立てる。

みずから退路を断つことで勝は迷うことも怖れることも慌てることもなく虚心坦懐に一世一代の命のやりとりに臨んでいく。

渡米で幕府を超えた世界へ

勝は現在の東京都墨田区両国にある父・小吉の実家の男谷家で生まれた。幼名は麟太郎。男谷家三男の小吉は勝家の娘・信の婿養子として小普請組という無役・41石の旗本になる。

９歳のとき勝は野良犬に睾丸を噛まれて生死の境をさまよう。医者が震える手で傷口を縫合すると余りの痛さに泣き叫んだ。小吉は枕元に刀を突き立て「ここで死んだら犬死にだ」と黙らせた。小吉は毎晩、水垢離をしてわが子の回復を祈り、勝を抱いて寝た。幸い2カ月後に傷も癒え、通常の生活に戻ることができた。しかし犬に出会うとたちまち震え出すほど生涯にわたって犬を怖がるようになった。

勝海舟

10代から島田虎之助のもとで剣術と禅に打ち込み、直心影流の免許皆伝となる。16歳で家督を継ぎ、佐久間象山の門下生として蘭学と西洋兵法を熱心に学ぶ。勝は赤坂に私塾を開き、妹の順は象山に嫁ぐ。海舟という称号は象山揮毫の「海舟書屋」に由来している。

黒船と呼ばれたアメリカのペリー艦隊が1853年、浦賀に来航し、幕府に開国を要求した。これを踏まえて老中の阿部正弘が幕臣から町人に至るまで海防に関する意見を広く募ったところ西洋式兵学校の設立や官製翻訳書の刊行を唱えた勝の進言が評価され、異国応接掛附蘭書翻訳御用に抜擢される。長崎の海軍伝習所で5年ほど軍艦の航海技術などを学び、幕府が新たに創設した軍艦操練所の教授方頭取に任命された。

幕府は1860年、日米修好通商条約の批准書を交換するためにアメリカ海軍の軍艦で遣米使節をサンフランシスコへ派遣する。同時に護衛という名目で幕府が所有する軍艦・咸臨丸も派遣され、勝や通訳のジョン万次郎、のちに慶応義塾を創設する福沢諭吉らが渡米した。日本初の太平洋横断